



Title	時間的内在性質の問題と四次元主義ステージ説
Author(s)	西條, 玲奈
Citation	哲学, 44, 7-23
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35067
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_LP7-23.pdf



時間的内在性質の問題と 四次元主義ステージ説

西 條 玲 奈

はじめに

緑色だったバナナが熟れて今は黄色になっている。座っていたので体の形は曲がっていたが、立ち上がれば形はまっすぐになる。およそ色や形といった性質は時間的（temporal）なものであり、それらが変化したからといって事物が持続しなくなるとは思われない。だが一方で、同一のバナナが緑色でありかつ黄色であることなど誰も認めまい。緑色と黄色という両立不可能な性質を同一の事物は持ちえないからだ。しかし異なる時点においてという条件があれば、同一のバナナが各時点において両立不可能な性質をもつことに疑念は抱かれない。だがなぜ異なる時点においてなら両立不可能な性質もちうるのだろうか。

このように性質変化を経ても事物が持続するのはなぜかという問題は、デヴィッド・ルイスの提起によって「時間的内在性質¹（temporary intrinsics）の問題」と呼ばれている。またルイスはこの問題に対して（i）時点関係説、（ii）現在主義、（iii）四次元主義という三つの解決策を提案した（cf. Lewis（1986）, pp. 202-204）。これらの解決策はそれぞれ異なる長所と短所を持つ。本稿ではセオドア・サイダーが考案したステージ説を採用することによって四次元主義がもつ欠陥を克服できることを確認する。

1 時間的内在性質の問題

1・1 変化のパズル

時間的内在性質の問題とは変化についての問題である。時点 t_1 で人間 O は座っているので曲がっている。別の時点 t_2 で O は立っているので曲がっていない。曲がっていると曲がっていないは両立不可能な性質である。とすると、同一の O は両立不可能な性質を持たねばならないことになる。これは矛盾である。だが通常 O は姿勢の変化を通じて持続するとわれわれは考える。とすればそれはいかにして可能になるのか。

しかしながら、これだけでは何が問題なのかよく分からないのではないだろうか。事物が変化するのはあまりにも当然のことだからである。また異なる時点に両立不可能な性質をもつことは何の不思議もなさそうに思える。そこでこの問題をより洗練させるため、トレントン・メリックスによる問題の定式化²を参照することにしたい。

- (1) t_1 における O と t_2 における O は同一である。(背理法の仮定)
- (2) t_1 における O は曲がっている。(前提)
- (3) t_2 における O は曲がっていない。(前提)
- (4) もし t_1 における O と t_2 における O が同一なら、 t_1 における O がもつ全ての性質 F を t_2 における O がもつのでなければならない。(同一者不可識別の原理)
- (5) t_1 においても t_2 においても O は曲がっておりかつ曲がっていない。((2)(3)(4)より)

この議論を詳細に追ってみよう。ステップ(1)で仮定していることは O の通時的同一性である。ステップ(2)から(3)への推移は O が曲がっているという形から曲がっていないという形へと変化したのだといえるだろう。変化を表すためには、「曲がっている」と、「曲がっていない」という両立不可能な

性質を同一の O に帰属させることになる。

さらにステップ(4)では同一者不可識別の原理に言及される。繰り返すと、それは次のような原理である。

(LL) もし x と y が同一なら、 x のもつ全ての性質を y はもち、かつ y のもつ全ての性質を x もまたもつ。

たとえばバナナ B1 とバナナ B2 が同一なら、B1 と B2 は形、色、かさなど全ての性質を共有していることになる。先の議論においては $t1$ における O と $t2$ における O は同一であると仮定されていたのだから、この原理を適用するなら、 $t1$ における O のもつ性質を $t2$ における O もまたもたなければならぬことになる。したがってステップ(5)、 $t1$ においても $t2$ においても O は曲がっておりかつ、曲がっていないのでなければならないという矛盾が出てくる。矛盾が出てくるのだから、最初の仮定が誤りということになる。それゆえ $t1$ における O は $t2$ における O と同一ではない。

しかしこの結論は受け入れ難い。変化を通じて同一の事物が持続するという直観を確保するにはどうすればよいだろうか。このパズルのどこかに奇妙なステップがあるはずである。ひとつの解決策として思いつくのは、ステップ(4)に対して反論することである。つまり、問題の結論は同一者不可識別の原理を通時的に適用するから生じるものとはいえないか。この原理は特定の時点における事物について適用されるものとみなし、通時的に適用しなければよいのだ。

だが、同一者不可識別の原理は「通時的には適用しない」という制限なしに妥当するものだとは通常は考えられるだろう。そのような制限を設けなければ同一者不可識別の原理という妥当な原理は、時間を通じた性質の変化というなじみの現象と不整合をきたしてしまうのだろうか。可能ならば、同一者不可識別の原理と変化を整合的に説明できることが望ましい。

1・2 持続についての直観

前節では同一者不可識別の原理と変化の整合的な説明が求められた。事物の持続を説明する際には、それ以外にも救い出したい直観がいくつかある。それらについてサリー・ハズランガー³を参照しつつ提示することにした。

- (6) 対象は変化を通じて持続する。(持続条件)
- (7) 変化に関与する性質は両立不可能なものである。(両立不可能性条件)
- (8) 何ものも両立不可能な性質はもたない。たとえば、何ものも P かつ $\neg P$ ではありえない。(無矛盾の法則)
- (9) もし対象が変化を通じて持続するなら、変化の前に存在するその対象は変化の後に存在する対象と同一である。すなわち、もとの対象は変化を通じて持続する。(同一性条件)

(LL) もし x と y が同一なら、 x のもつ全ての性質を y はもち、かつ y のもつ全ての性質を x もまたもつ。

整合的に持続を説明するには、これらの条件のうちいずれかを否定するという選択もある。だが能うことならこれらの直観全てを救い出せる持続についての理論があればいい。事物の持続の仕方をいかに説明するかにより、変化についての時間的内在性質の問題への答え方も変わる。以下ではまず持続についての代表的な二つの見解を紹介し、次いで時間的内在性質の問題に対する応答を検討する。その上で、サイダーの四次元主義ステージ説がこれらの直観全てを救うことのできる最も好ましい立場であることを確認するものである。

2 四次元主義と三次元主義—持続についての二つの見解—

2・1 四次元主義と P 持続 (perdurance)

持続の説明の代表的な立場の一つは四次元主義と呼ばれるものである。四

次元主義とは事物は空間的部分をもつように時間的部分をもつと考える立場だ。たとえば、ソクラテスの鷺鼻はソクラテスの空間的部分であり、ソクラテスの兵役時代は生まれてから死ぬまで時間的に広がっているソクラテス四次元連続体の時間的部分である。事物は空間的に広がっているように時間的にも広がると考えるこの見取り図はソーセージモデルとも呼ばれる。ルイスの用語法に従えば、こうした持続のモデルはP持続(perdurance)と呼ばれており、次のように定義される。

何かがP持続する(perdure)のは、異なる時間的部分あるいはステージを異なる時点にもつことによって持続するときかつそのときに限る。(Ibid, p. 202)

この持続の説明に従うと、Oは t_1 に位置する曲がっている時間的部分をもち、 t_2 に位置する曲がっていない時間的部分をもつ。これはちょうど、一つの道に凹凸の激しい場所と滑らかな場所があるのと類比的な仕方で持続しているのである。

ただし一つ注意されたい。P持続が個体の生成から消滅まで広がる四次元連続体なるものを要求することは、一見して過去、現在、未来すべてにおいて当該の個体の時間的部分が等しく存在することを含意するように思える。だがそうではない。過去、現在、未来という時間様相の存在論的身分差についての議論と、事物の持続のあり方に関する議論は別のものである。事実、現在の事物しか存在しないという現在主義とP持続の両立可能性については既に議論がある⁴。けれども議論の複雑化を避けるため、本稿ではこの問題に立ち入らない。

2・2 三次元主義とEN持続(endurance)

四次元主義に対して事物に時間的部分を認めない立場を三次元主義という。確かに、ソクラテスの全体は彼が生まれてから死ぬまで広がる四次元連

続体であると考えた場合いささか奇妙なことになる。たとえば紀元前399年にクリトンがソクラテスと対話しているとしよう。このときクリトンはソクラテスの全体ではなく、紀元前399年に位置する時間的部分と対話していることになる。眼前のソクラテスが全体としての統一をもたない部分である、などということがあろうか。そこで三次元主義では事物が時点ごとに全体としてまるとある (wholly present) と考える。たとえば紀元前424年デリオンの戦いに参じた時のソクラテスも一つの全体としてあるし、紀元前399年に毒杯を仰いだ時のソクラテスもやはり一つの全体である。こうした持続の仕方は P 持続に対して EN 持続 (endurance) と呼ばれ、次のように定義される。

何かが EN 持続する (endure) のは、それが一つより多くの時点において全体としてまるとあるときかつそのときに限る。 (*Ibid*, p.202)

この説明に従うと、O は t_1 において曲がっているという性質をもちつつ全体として存在し、 t_2 においては曲がっていないという性質をもちつつ全体として存在していることになる。

なお P 持続同様、EN 持続も特定の時間様相の存在論的身分にコミットするものではない。一見すると EN 持続は現在主義を含意しているようにみえるかもしれないが、もちろんそうではない。過去、現在、未来全てが等しく存在するとみなす永遠主義の立場とも EN 持続説は両立可能である。その場合、事物が「全体としてまるとある」各時点はすべて存在していると考えればよい。つまり、事物と時点の関係は、現在主義を採用した場合一対一になるけれども、永遠主義の場合には一対多になるのである。

3 時間的内在性質の問題に対する三つの解決策

以上の持続についての二つの説明をふまえて、時間的内在性質の問題への

解決策を検討することにしよう。冒頭で述べたように、ルイスは (i) 時点関係説、(ii) 現在主義、(iii) 四次元主義という三つの解決策を提案した。ここでは各々がもつ利点と欠点を確認したい。

3・1 時点関係説

時点関係説では事物は EN 持続すると考える。加えて形や色といった性質とは実は擬装された関係だという戦略をとる。すなわち、O は t_1 において端的に曲がっているという性質をもつのではない。そうではなく、O は時点 t_1 に対して曲がっているという形関係を担うのである。いわば、O は「 t_1 において曲がっている (bent-at- t_1)」ならびに「 t_2 において曲がっていない (not-bent-at- t_2)」という時間インデックスつき性質をもつのである。

このように考えるならば、「 t_1 において曲がっている」と「 t_2 において曲がっていない」は両立可能である。だから、パズルの定式化のステップ(5)は次のように書き換えられる。

(5)' t_1 においても t_2 においても O は t_1 において曲がっておりかつ t_2 において曲がっていない。

これが矛盾でないことは明白であろう。いわば、変化に関与する性質は両立不可能な性質であるという(7)両立不可能性条件を却下することで問題の解決を図るのである。それゆえ一・二節であげた直観のうち、時点関係説は一つを犠牲にしなければならない。

だが時点関係説では(6)持続条件、(8)無矛盾の法則そして(9)同一性条件の両立可能性を確保できる。この立場では事物を EN 持続するとみなすのだから、変化を通じて事物が持続するという(6)持続条件は議論の前提である。ならびに EN 持続を採用するということは、事物が各時点において全体としてまるごとあるとみなすのだから、 t_1 の O と t_2 の O は同じ O であるという前提に立つ。これは(9)同一性条件に他ならない。また(7)両立不可能性条件の

却下により、事物は両立不可能な性質をもつことはないのだから、(8)無矛盾の法則を侵犯することもない。この立場は異なる時点に異なる性質をもつことは可能であるという常識的な見解をよく反映した解決策であるともいえるだろう。

しかし時点関係説の解決策には依然として問題がある⁵。ルイスはそもそも形が性質ではなく関係であるというのは奇妙だとしてこの立場を批判する (*Ibid.*, p.204)。しかしこれだけでは批判として十分ではない。時点関係説の支持者は、形を内在的性質ではなく他の対象に依存して所有される外在的性質とみなすことになる。そこに何の問題があろうか。通常の事物は空間のうちに位置を占めるように時間のうちにも位置を占めている。とすれば子供の存在なくして「父親である」といった外在的性質がありえないように、時間の存在なくして「曲がっている」といった性質もまた考え難いのではないか。

時点関係説の真の困難は、この立場が時間インデックスつき性質を基礎的なものとみなす点にある。つまり O は端的に「曲がっている」という性質をもつのではなく、「t1-において-曲がっている」という時間インデックスつきの性質をもつことになる。だがこれもまた直ちに問題となるのではない。たとえばライアン・ワッサーマンはどちらを基礎的な概念として採用しても、もう一方の概念を定義できることを示している⁶。とすれば、どちらか一方の概念が基礎的で他方が派生的なのではなく、両者は同等ではないのだろうか。

しかし小山虎が指摘する (cf. 小山 (2003)) ように、私もまた時間インデックスつき性質を基礎的なものとみなすと次のような困難が生じると考える。たとえば t1 においてバナナ B1 は緑色であり、t2 においてアボカド A1 もやはり緑色だと想定しよう。この場合「t1 におけるバナナ B1 と t2 におけるアボカド A1 は同じ色である」と言いたくなるだろう。だが時点関係説に従えば、B1 がもつのは「t1-において-緑色」という時間インデックスつき性質であり、A1 がもつのは「t2-において-緑色」という別の時間イン

デックスつき性質である。つまり両者が「緑色」という同じ性質をもつと言えなくなってしまう。それゆえ時点関係説は、時間インデックスつき性質を基礎的とするため困難に逢着するといえよう。

3・2 現在主義

第二の解決策は現在の事物だけが存在するとみなす現在主義である。仮に t_2 が現在だとしよう。 t_1 は過去であるから「O は曲がっていた(was bent)」のであり、かつ「O は曲がっていない (is not bent)」のである。これらがそれぞれ時制つきの異なる命題を表すとする、すなわち時制を真摯に受け取る (taking tense seriously) ならば、二つの文が両立可能であることに異存はないだろう。確かに「O は曲がっていた」かつ「O は曲がっていなかった」のように、同じ時制において両立不可能な性質を事物がもつことを表す命題が同時に真になることはありえない。しかし二つの命題の時制が異なるならば、そこにおいて事物が両立不可能な性質を持つと表されていても問題はないのである。

また O が持つ性質は現在の t_2 における「曲がっていない」だけであり、存在しない t_1 における性質をもつことはない。それゆえ O は両立不可能な性質をもつこともない。これはステップ(4)の (LL) 同一者不可識別の原理の適用を拒否することで問題の解決を図るものといえる。現在が t_2 であるならば存在しない t_1 における性質を O がもつ必要はない。

現在主義の利点は、時点関係説と違い形は端的な性質をもつといえるため時間インデックスつき性質にまつわる困難を回避できる点にある。なぜなら、存在するのは現在の時点だけなのだから形といった内在的性質を敢えて時点との関係として解釈し直す必要はないからである。加えて「曲がっている」と「曲がっていない」が両立不可能な性質であることを認めるから(7)両立不可能性条件も確保できる。これも時点関係説にはない利点である。もちろん、現在主義を採用しても何かが両立不可能な性質をもつことにはならないから、(8)無矛盾の法則に反することもない。

しかし現在主義にも問題点がある。現在主義に対してルイスは事物の持続を否定するという批判を投げかける (Lewis (1986), p.204)。これは(6)持続条件の拒絶に等しい。というのも、O は姿勢の変化を通じて持続するためには少なくとも二つの時点が存在しなければならないからだ。つまり O が曲がっている時点と曲がっていない時点である。しかし現在主義は現在以外の時点の存在にコミットしない。それゆえ変化を通じた持続と現在主義は両立不可能である。

とはいえこの段階では現在主義者が白旗を掲げる必要はない。たとえばディーン・ジーマーマンは Zimmerman (1998) において時制を真摯に受けとることで、先述の無持続批判に応じている。彼によれば、(PC)「少なくとも二つの時点があり、一つの時点において O は曲がっておりもう一つの時点において O は曲がっていない」といった持続についての日常的信念を表わす言明を、時制つき命題の選言とみなせる。この選言 (PC)' を形式的に表現するために標準的な一階述語論理に過去を表す時制演算子「ダッタ」と未来を表す演算子「ダロウ」を加えた言語を用いる。ただし定項 o を O、述語 B を「曲がっている」として解釈する。

$$(PC)' \quad (Bo \wedge (\text{ダロウ} (\neg Bo) \vee \text{ダッタ} (\neg Bo))) \vee (\neg Bo) \wedge (\text{ダロウ} (Bo) \vee \text{ダッタ} (Bo)) \vee (\text{ダロウ} (Bo \wedge (\text{ダロウ} (\neg Bo) \vee \text{ダッタ} (\neg Bo)))) \vee (\text{ダロウ} (\neg Bo \wedge (\text{ダロウ} (Bo) \vee \text{ダッタ} (Bo)))) \vee (\text{ダッタ} (Bo \wedge (\text{ダロウ} (\neg Bo) \vee \text{ダッタ} (\neg Bo)))) \vee (\text{ダッタ} (\neg Bo \wedge (\text{ダロウ} (Bo) \vee \text{ダッタ} (Bo))))$$

このように (PC)' は存在量子が現れない文なので (PC) は存在言明ではない。つまり、時制が異なる二つの時点において O は別の性質をもつのだと現在主義者は語りうるのだ。しかもこのとき現在以外の時点には存在論的にコミットしていない。それゆえ (PC)' は現在主義の枠組みにおいて主張しうる文である。

しかし現在主義はなお問題に直面する。サイダーによって (Sider (2001), pp. 25-26) 提案されたこの反論によれば、現在主義は複数の時点を含む文の真理性を否定することになってしまう。例えば「西條はソフォクレスを賞賛する」という真なる文を現在主義の枠組みで考慮してみよう。もし「西條はソフォクレスを賞賛する」が現在において真ならば、固有名「西條」および「ソフォクレス」の指示対象が現在存在し、かつ現在において西條がソフォクレスを賞賛しなければならない。だがソフォクレスが存在するのは過去(紀元前496年頃～紀元前406年)であり現在ではない。とすれば、西條は存在しない対象を賞賛することになる。このような事実はありえない。他方で「西條はソフォクレスを賞賛する」が過去において真ならばソフォクレスが存在した時点で西條は彼を賞賛しなければならない。だが少なくともソフォクレスの存在していた時期に西條は存在しない。するとソフォクレスは存在しない対象に賞賛されることになる。これもまたおかしい。それゆえ複数の時点を含む時間交差文は現在主義にとって克服すべき難点として残される。

3・3 四次元主義

それでは最後に第三の解決策を検討しよう。それは四次元主義によるものである。事物はP持続するのでOは生まれてから死ぬまで時間的に広がった四次元連続体である。t1に位置するOの時間的部分は曲がっているという性質をもち、t2に位置するOの時間的部分は曲がっていないという性質をもつ。つまり異なる性質は異なる時間的部分に属している。両立不可能な性質を別の事物がもつことには何の困難もない。事物の性質変化とは、空間的な位置の相違と類比的なものとして理解される。議論のステップ(4)での「t1におけるO」と「t2におけるO」は別々の時間的部分であるから、二つの異なる時間的部分に(LL)同一者不可識別の原理を適用する必要はないのである。

四次元主義の利点は次のようなものだ。まず現在主義と同様に時間インデックスつき性質ではなく端的な性質を基礎的なものとみなすことができ

る。異なる時間的部分という異なる事物が端的に「曲がっている」や「曲がっていない」という性質をもつからである。また(6)持続条件、(7)両立不可能性条件、(8)無矛盾の法則の間にも不整合が生じない。事物はP持続するのだから(6)持続条件は議論の前提である。各々の時間的部分は端的な性質をもつので変化に関与する性質は両立不可能である。これは(7)両立不可能性条件に他ならない。もちろん(8)無矛盾の法則に反することもない。加えて(LL)とも両立する点が四次元主義の魅力である。曲がっている時間的部分と曲がっていない時間的部分は部分としては異なっているけれども、それらは同一の四次元連続体に属すからだ。異なる部分が両立不可能な性質をもつとしても四次元連続体全体としては同一である。つまり四次元連続体の同一性として(LL)は確保される。したがって四次元主義は(9)同一性条件をのぞき、持続についての直観を全て確保できるのだ。

もちろん四次元主義にも問題点がある⁷。四次元主義に従えば、事物は異なる時点に異なる時間的部分をもつことによって持続するのであった。とすれば、これは事物そのものが変化を被るとはいえないのではないか。Oの t_1 における時間的部分と t_2 における時間的部分は別の事物だからである。これは、変化の前の事物と後の事物が同じであるという(9)同一性条件に反する。四次元主義の問題は、変化を通じて持続する主体が存在しない点にあるといえよう。そこで、次章ではサイダーの四次元主義ステージ説を採用することで(9)同一性条件が確保できることを追認する。

4 時間的内在性質の問題と四次元主義ステージ説

これまでの考察で(i)時点関係説、(ii)現在主義、(iii)四次元主義のいずれの解決策にも問題点があると確認された。本章では四次元主義の(9)同一性条件を確保できないという問題点を克服するためにサイダーの四次元主義ステージ説を採用する。

4・1 ステージ説と EX 持続 (exdurance) ⁸

四次元主義ステージ説という名称からも察せられる通りステージ説は四次元主義の一種である。ステージ説も事物は空間的部分をもつように時間的部分をもつと考える。存在論的にはソーセージモデルを採用する P 持続説とステージ説は同じであると考えてさしつかえない。

ではステージ説の特徴とは何なのか。ステージ説では時間的に広がった四次元連続体を瞬間的ステージの和と考える。何より瞬間的なステージ同士が対応者関係を担っているとみなす点が特徴的である。ステージ同士の時間的対応者関係は、ルイスの様相対応者理論を応用したものに他ならない。様相対応者理論において仮にソクラテスが哲学者ではなかったとしよう。対応者理論によれば「ソクラテスは哲学者ではなかったかもしれない」が真になるのは、ソクラテスその人が哲学をしなかった可能世界があるからではない。そうではなくソクラテスの対応者が哲学をしなかった可能世界があるからである。時間的対応者理論もこれと類比的である。たとえば「ニザンは二十才だった」が真になるのは、ニザンが現在の時点より前の時点で二十才であるからではない。そうではなくより前の時点で二十才であるニザンの対応者がいるからである。このようなステージ説による持続を EX 持続 (exdurance) と呼ばれ、次のように定義される。

何か EX 持続する (exdure) のは、より後のステージがより前のステージの対応者であることによって持続するときかつそのときに限る。

先ほど存在論的には P 持続と EX 持続は同じであると述べた。両者の違いが浮き彫りになるのは、固有名の指示対象に関する見解の相違である。P 持続説では「テッドは少年だった」という文における「テッド」は彼が生まれてから死に至るまで広がる四次元連続体を指示する。だが少年であるところの対象が、生まれてから死ぬまで広がっている彼の四次元連続体であるという見解は明らかにおかしい。少年時代も老年時代も部分としてもつところの

四次元連続体が特定の年代であるとはいえないからだ。対してステージ説では「テッドは少年だった」という文における「テッド」は現在のテッドステージを指示する。現在のテッドステージが少年であるテッドステージと時間的対応者関係にあるというわけである。

4・2 時間的内在性質の問題とステージ説

それではこのステージ説を用いて時間的内在性質の問題について四次元主義が抱えていた難点を解消してみよう。これはすでに Sider (2000) で試みられているが、サイダーの解決策が有効であることをここでは確認したい。

ステージ説でも基本的には四次元主義的解決策を踏襲する。すなわち、四次元連続体 O は t_1 に位置する曲がっているという時間的部分をもち、 t_2 に位置する曲がっていないという時間的部分をもつ。異なる時間的部分が両立不可能な性質をもつことに困難はない。四次元主義的解決策で問題だったのは、事物そのものが変化を被るといえない点にあった。サイダーのステージ説は時間対応者関係によって、 O そのものが変化を通じて持続するということを説明する。これは(9)同一性条件の確保に他ならない。

サイダーの戦略は、ちょうどソール・クリプキによる様相対応者理論へのハンフリー反論に応じるルイスのものと類比的である。有名なハンフリー反論とは次のようなものだ。

「様相対応者理論に従えば、」…もし「ハンフリーが選挙で勝ったかもしれない（としたら彼はしかじかのことをしたかもしれない）」と言う場合、われわれはハンフリーに起きたかもしれないことについてではなく、「対応者」という他の誰かについて話しているのである。(Kripke (1980), p.45)

(9)同一性条件確保の要請は、ハンフリー反論の時間対応者理論版ともいえる。時間対応者理論によれば、「 O は曲がっていた」と言う場合、われわれ

はOの姿勢についてではなく「対応者」という他の誰かについて話していることになる。だが曲がっている姿勢から曲がっていない姿勢へと変化したのはO自身ではないだろうか。

しかしサイダーはルイスの応答を敷衍してこう応じる。「Oは曲がっていた」という文は現在においてOがかつて曲がっていた、を意味することを否定するものではない。なぜなら、この文は「かつて曲がっていた」という性質を現在のOステージに帰属させるのであって、他の誰かに帰属させるのではないからだ。それゆえ現在においてOそれ自身が曲がっていたのである。確かにステージ説の分析では、現在のOステージが曲がっていたという性質をもつのは、別の対象の屈折(bentness)に依存している。しかし曲がっている姿勢から曲がっていない姿勢へと変化したのはOそのものに他ならない。ならば変化を通じて同一のOが持続しているということができよう。このことは(9)同一性条件を満たす。ゆえに四次元主義の抱えていた時間的内在性質に関する困難はステージ説によって解消されるといえる。とすれば、四次元主義ステージ説は一・二節であげた持続についての直観を全て両立可能にする好ましい見解ということになるだろう。

結語

これまで性質が変化しても事物が持続するのはいかにしてかという時間的内在性質の問題について考察してきた。問題の提起者であるルイスによれば、それには時点関係説、現在主義、四次元主義という三つの解決策があるのであった。だがどの解決策にも利点と同時に問題点がある。しかし事物そのものが変化を被るといえないという四次元主義が抱える問題点をサイダーが提案した四次元主義ステージ説によって克服できることが確認された。それゆえ事物の持続を説明する立場として四次元主義ステージ説が魅力あるものであることが示されたと考えるものである。

- 1 内在性質とはその対象が他のものから独立してどのようにあるかのみ依存する性質である。たとえば曲がっているや、黄色いなどがそうである。時間的な内在性質とは、永久ではなくある時点においてはもつけれども別の時点においてはもたないような内在性質を指す。なお、内在的性質に対して対象が他の事物に依存して所有する性質を外在的性質 (extrinsics) と呼ぶ。
- 2 cf. Merricks (1994)。ここで用いた定式化は実際に彼がなしたものを多少変更している。
- 3 cf. Haslanger (2003)。ただし彼女は救い出したい直観のうちに (LL) を含めず、次のような「真主体 (proper subject) 条件」なるものを加えている。「変化を被る対象はそれ自体変化に伴う性質の真主体である。たとえば持続する O は両立不可能な性質をもつ真主体そのものである。」
- 4 現在主義的 P 持続説 (四次元主義) の可能性はさまざまに論じられる。その例として Markosian(1994)、Broggaard(2000)、Sider(2001)、小山(2003)などが挙げられる。
- 5 その他、時点関係説については様々な批判がなされている。キャサリン・ホーリーは Hawley (1998)、(2003) pp. 16-20 で仮に内在的性質と呼ばれるものが時点と事物の関係だとするならば、それがいかなる関係であるかを問う。彼女の批判は決定的なものではないが関係概念について興味深い示唆を与えている。
- 6 「 x が端的に曲がっているのは、 x はそれが存在するどの時点に対しても「において曲がっている」という二項関係をもつときかつそのときに限る。… x が t に対して「において」曲がっているという二項関係をもつのは、 t における x の時間的部分が「曲がっている」という一項性質をもつときかつそのときに限る。」(Wasserman(2003)p. 416)
- 7 本稿では紙幅の都合で扱っていないが、他にもヴァン・インワーゲンが van Inwagen (1990) において提示した四次元主義の様相問題がある。四次元主義者においては、時間的部分のもつ時間的幅は本質的なもの、つまり様相において広がりをもたない (modally inductile) が、それはおかしい。この問題に応じるには四次元主義者は様相対応者理論を採用するしかないという。様相問題に対しては Copeland (2001) による説得的な応答がある。彼らは個体とその最大の時間的部分を同一とみなす必要はないと論じて様相問題を退ける。
- 8 Exdurance というタームはハズランガーの造語である。(cf. Haslanger (2003))

参考文献

- Broggaard, Berit (2000) "Presentist Four-Dimensionalism" *The Monist*, Vol. 83, No. 3, pp. 341-356

- Copeland, Jack, Dyke, Heather and Proudfoot, Diane (2001) "Temporal parts and their individuation" *Analysis*, Vol. 61, No. 4, pp. 289-93
- Haslanger, Sally (2003) "Persistence Through Time", M. Loux and D. Zimmerman eds. *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford University Press, pp. 315-354
- Hawley, Katherine (2003) *How Things Persist*, Clarendon Oxford
- (1998) "Why Temporary Properties are not Relation Between Physical Objects and Times" *Proceedings of Aristotelian Society*, Vol. 98, No. 2, pp. 211-216
- Hinchliff, Mark (1996) "The Puzzle of Change" *Supplement: Philosophical Perspective*, 10, *Metaphysics*, pp. 119-13
- van Inwagen, Peter (1990) "Four-Dimensional Object" *Noûs*, Vol. 24, No. 2, pp. 245-255
- 小山虎 (2003) 「時間の内在の性質と四次元主義」『科学哲学』36-2 pp. 165-177
- Kripke, Saul (1980) *Naming and Necessity*, Harvard University Press
- Lewis, David (1986) *On the Plurality of Worlds*, Blackwell
- Markosian, Ned (1994) "The 3 D/4 D Controversy and Non-Present Object" *Philosophical Papers*, 23, pp. 243-249
- Merricks, Trenton (1994) "Endurance and Indiscernibility" *The Journal of Philosophy*, Vol. 91, No. 4, pp. 165-184
- Sider, Theodore (2001) *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Clarendon Press Oxford
- (2000) "The Stage View and Temporary Intrinsics" *Analysis*, Vol. 60, No. 1, pp. 84-88
- (1996) "All the World's a Stage" *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 74, No. 3, pp. 433-53
- Wasserman, Ryan (2003) "The Argument from Temporary Intrinsics" *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 81, No. 3, pp. 413-419
- Zimmerman, Dean (1998) "Temporary Intrinsics and Presentism" D. Zimmerman and P. van Inwagen eds. *Metaphysics: The Big Questions*, Blackwell, pp. 206-219